

令和4年度 入学式 式辞

本日、和歌山大学に入学された949名の皆さん、入学おめでとうございます。そして大学院に入学・進学された235名の皆さん、入学・進学おめでとうございます。皆さんを和歌山大学に迎えることを、ご臨席を賜りましたご来賓の皆さまと、列席しております理事・副学長、学部長および教職員とともに、心よりお祝いたします。



また、ご多用のところ、門出となるこの式にご臨席を賜りました和歌山県副知事 下 宏（しも ひろし）様、和歌山市長 尾花 正啓（おばな まさひろ）様、本学後援会会長 樫畑 直尚（かしはた なおひさ）様、同副会長の大江 嘉幸（おおえ よしゆき）様、井出 幸男（いで ゆきお）様、西條 工（にしじょう たくみ）様、増田 健司（ますだ けんじ）様には、衷心より御礼申し上げます。

皆さんは、一昨年からはまった新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響を受けた厳しい社会環境の中で、自己研鑽を重ね、受験勉強に励まれ、その努力の結果として、本日の入学式を迎えられました。かつてない環境の中で皆さんが尽された努力を讃え、そして和歌山大学に入学されますことを心より歓迎いたします。

さて、これから、大学での新しい学びが始まります。入学式にあたり、改めて皆さん一人一人がこれからの学びに何を期待し、何を得ようとするのか、大学で学ぶ志を確認してください。

皆さんは様々な思いを胸に、大学へ進学されたことでしょう。大学で学ぶ理由についての調査は幾度となくされてきましたが、いずれの結果においても、就職への準備、あるいは就職の有利さが上位に挙げられています。確かに、大学での学びは、社会で高度な知識を活用する職に就き、職務を実行する際の糧となります。社会での活躍を目指して、教育を受けることは大変素晴らしいことです。しかしながら、その考え方に拘泥してしまうと、就職に関係のない学問や授業は必要ないという考えに陥ってしまいます。皆さんにとってわかり易い例を挙げますと、数学は文系への進学には必要ないというような考え方です。しかし、よく考えていただきたいのは、関係のあるなし、あるいは必要のあるなしの判断は、現状でのあるいは限られた知識に基づく判断であるということです。

現在、「先が見えない」と言われるように、社会は激動の中にあります。我々は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大、地球温暖化、エネルギー問題などの地球規模の課題、人口

減少や地域産業の停滞などの地域の課題を抱え、その解決が求められています。これらの課題は、規模に関わらず、幾つもの要素が複雑に絡み合ったものです。したがって、これまでの社会で共通に認識され、当たり前に行われてきた施策、方法や考え方では課題解決は困難であり、様々な視点から多岐に渡って課題を検討することが求められます。この過程では、新しい仕組みが模索され、時にはその仕組みやこれまでの仕組みを捨てることもあります。このような試行錯誤の中で、課題の解決あるいは新しい価値を創造する取り組みに寄与するには、あるべき社会を想定して、その社会を実現するために必要となる知識や技能を得ることが必要です。しかし、変化し続ける社会の中で、将来の社会の姿を描くことは困難です。したがって、さまざまな社会の変化に対応できるよう、今現在の知識の枠から離れ、新しい視点を得られるように、広く学ぶことが重要です。さらに、広く学ぶ中で、皆さんが興味を持ったことを突き詰めて学ぶことにより、専門的な知識の柱を形作ることも重要です。知識の柱を作ることで、その周辺領域へと知識を拡大していくことが可能になります。広く学び、知識の柱を作ることにより、皆さんの学びを進化させていくことで、社会変革にしなやかに対応できる力が身につくこととなります。



和歌山大学は、教育学部、経済学部、システム工学部、観光学部の四つの学部から構成される小規模の国立大学です。しかし、その教育のあり方は他大学とは大きく異なっています。多くの大学では、学部は細分化された学科から構成されていますが、本学の四つの学部はいずれも一学科あるいは一課程のみで構成されています。このような教育

体制をとることで、自らの主体性に基づいた学びの選択が可能となります。また、学部の専門性に捉われることなく、今、社会で求められている教養、知識あるいは技能を学ぶ機会や、自らの興味に基づく学びを進める機会が得られるよう、柔軟な学びを提供しています。このような大学教育のあり方は、和歌山大学独自のものです。本学がこのような教育体制をとるのは、学修者たる皆さんが「大学で何を教わるのか？」という受け身の姿勢で学ぶのではなく、「自ら何を学ぶのか？」という主体性に基づく学びを進めていただきたいという強い思いからです。

大学での学びで最も重要なのは、自らの意志と判断に基づいて、主体的に学ぶことです。剣道や茶道では、修行の段階を守・破・離の言葉で表します。「まもる」の漢字で表す「守」は形、技を忠実に守り、確実に身につけることです。「やぶる」の漢字で表す「破」は、他の流派の教えについても考え、良いものを取り入れて、発展させる段階です。そして、「はなれる」の漢字で表す「離」は、独自の新しいものを生み出し確立させる段階です。これらの段階は、大学における学びにも当てはまります。皆さんは、これまで守の段階にいました。

そしてもうしばらくの間、守の段階にいると思います。その段階から主体性を発揮して、新しい学びを展開し、破の段階に進んでいただきたいと考えます。そして本学を卒業するときには、皆さん独自の形での知識、技能を身につけ、離を達成していただきたいと考えます。本学は、そのような学びができる教育の場となっています。和歌山大学での学びにより、皆さんが、それぞれの形、あるいは新しい道を作り出すことを祈念して、式辞といたします。



令和4年4月5日
和歌山大学 第17代学長
伊東 千尋